

1 都市計画とまちづくりと都市再生

- ・まちづくりの定義＝他人の土地にみんなのためになるような提案をして実現すること
- ・都市計画とまちづくりと都市再生の本質は同じだが、「主語」と「方法」が違う。
- ・都市計画の主語は「政府」、方法は土地を取用出来るという強い権利をもとにした、乱暴でかつ速いもの
- ・まちづくりの主語は「市民と行政」、方法は「みんな協力してよ」という善意？に満ちたもの
- ・都市再生の主語は「民間」、方法は貨幣を媒介として、空間の交換を加速度的に高めるもの

2 都市計画からまちづくり、都市再生へ

- ・都市計画は1888年から、まちづくりは1969年から、都市再生は1961年から。どれが正しいというわけではなく、都市の成長を、粗っぽくさばくためには都市計画でなければいけなかった。それが一段落ついた地域から、徐々に合意形成を前提とする都市計画にまちづくりと都市再生が置き換わっていく。
- ・まちづくりの合意形成は「市民とコミュニティ」の発達を前提とする。都市再生の合意形成は「市場」の発達を前提とする。

3 人口減少が始まった

- ・これから起きてくるのは、政府＝都市計画にせよ、市民＝まちづくりにせよ、市場＝都市再生にせよ、資源の全体量の減少と余る空間。
- ・主体の多さ、不足する空間、限られた時間が「合意形成」を必要とした。人口減少時代にはこの前提が反転する。
- ・都市のスポンジ化。ゆっくりと変わる、個人が変わる、小さな規模で変わる、様々なものに変わる、あちこち（ランダムな場所）で変わる。

4 人口減少時代のまちづくり

- ・空き家をつかってみる。空き家を発見する／使い方のイメージを出し合う／活用の計画をたてる／少しでも空間に手を入れる／人が集まる場として再生される

5 まちづくりの合意形成の場の変質

- ・「コミュニティ」から「結び目」へ
- ・まちづくり協議会のような代表性を持った場を介した時間のかかる合意形成ではなく、シャレット、ワークショップ、スクールと呼ばれるような、短期集中型の場で合意を調達。
- ・公式：A 科学的な厳密さ+B 政治的な正しさ+C 主体育成や組織経営的な正しさ。歴史的には科学>政治>主体という比重で公式がつくり出された。
- ・問題の総量自体が減少し、公式にのっとなって「よい合意」を調達せずとも「まちづくり」をやりたい人々の合意は調達されていく。公式は消滅し、未熟で不完全な合意形成をよしとしなくてはならない。
- ・空間を使いたいのは誰か、コストは誰が負担し回収されるのかが重視され、これらの条件をクリアする「誰か」を中心に据えて合意形成が組み立てられる
- ・成功と失敗は短期間で判断され、時間軸は短くなる。長距離走ではなく、走者が短距離でバトンをつなぎながら走り続ける長距離走のような形。
- ・計画の内容が個別的、小規模になり「広域性」や「総合性」が軽視される。ex.私たちは都市計画道路をやめさせることができない。